

いま「恋愛」に何が起きているの??

「婚活」時代の恋愛学

独身者はどこで「出会って」いるのか?

人口移動とカップリングの関係

日時：2009年10月13日火曜日 18：30-20：30

場所：さっぽろ自由学校「遊」

〒060-0061 札幌市中央区南1条西5丁目愛生館ビル2F TEL:011-252-6752 E-mail: syu@sapporoyu.org

札幌市立大学(原俊彦)

はじめに

□ いま「恋愛」に何が起きているの??

□ 「婚活」時代の恋愛学

＊人口社会学の視点

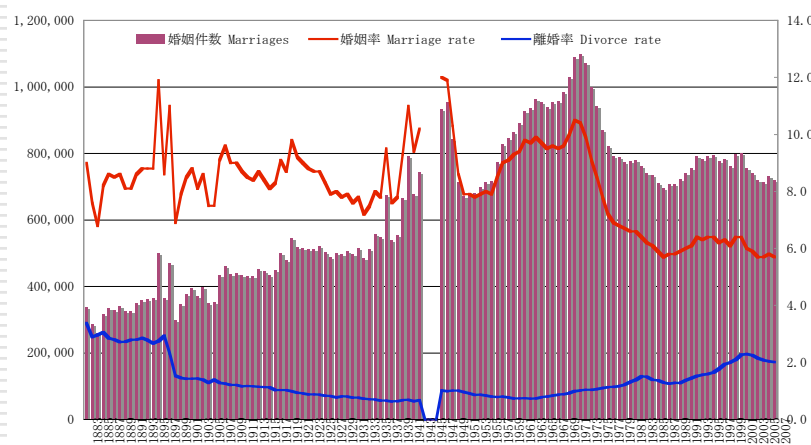
＊恋愛・結婚・出産・子育て

1. 日本の結婚動向
2. 『恋愛』を巡る状況変化
3. 出会いの街としての札幌の特異性
4. 「婚活（こんかつ）」問題を考える。

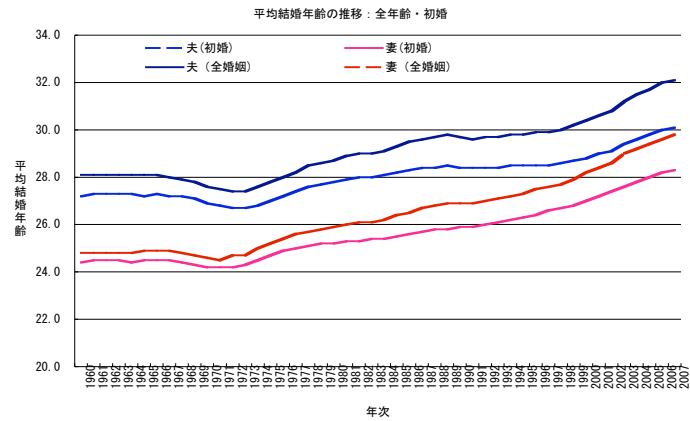
日本の結婚動向

歴史的推移

1972年の109万9984件(約110万件)＝第一次ベビーブーム世代(1947-49年)の女性が結婚適齢期(当時24歳 *クリスマスケーキ説)。普通婚姻率(人口千人あたりの総婚姻件数 単位 パーミル ‰)のピークもほぼ同じ1971年。1987年の69万6173件(5.7‰)まで低下。2000年はミレニアム婚の79万8138件(6.4‰)まで回復第二次ベビーブーム世代(1971-1974年生まれ)。離婚・再婚の増加。

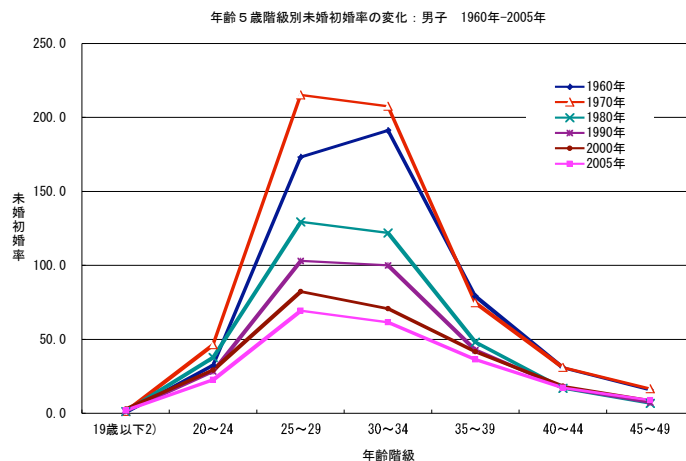


晩婚化？：平均初婚年齢の変化



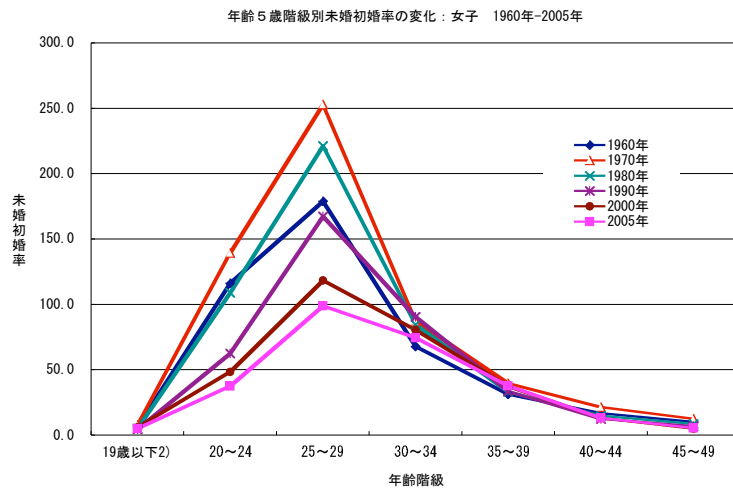
夫全婚姻が28.1歳から32.1歳(4.0歳上昇)、夫初婚で27.2歳から30.1歳(2.9歳上昇)、妻婚姻が24.8歳から29.8歳(5.0歳上昇)、妻初婚で24.4歳から28.3歳(3.9歳上昇)。つまり、男女とも平均で5歳ぐらい結婚のタイミングが遅くなった。一方、夫婦の年齢差も全婚姻で3.3歳から2.3歳、初婚で2.8歳から1.8歳へ、各々1歳、縮んだ。

晩婚化？：未婚初婚率の変化 男性



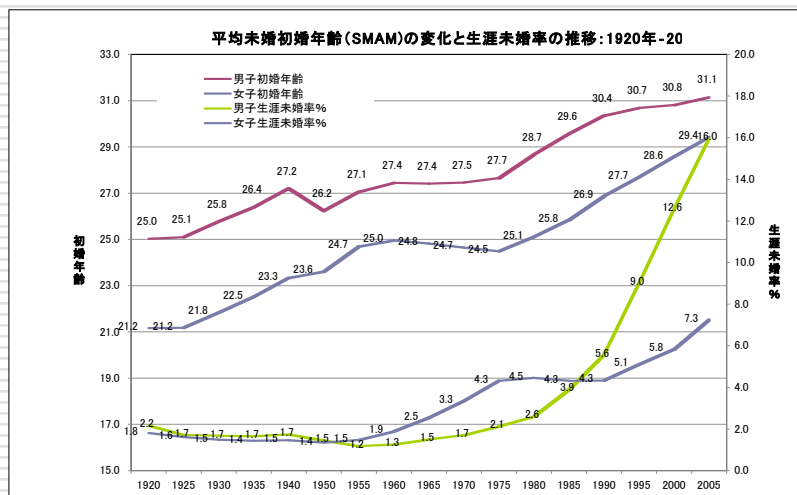
男性では1970年の25-29歳の215% (21.5%)が最も高く、そこから山が年々低く潰れて行き、2005年では3分の1以下の69.3% (6.9%)まで低下している。女性の方がもっと極端で、1970年の25-29歳の252% (25.2%)が最も高く、2005年では3分の1以下の98.8% (9.8%)まで低下している。

晩婚化？：未婚初婚率の変化 女性



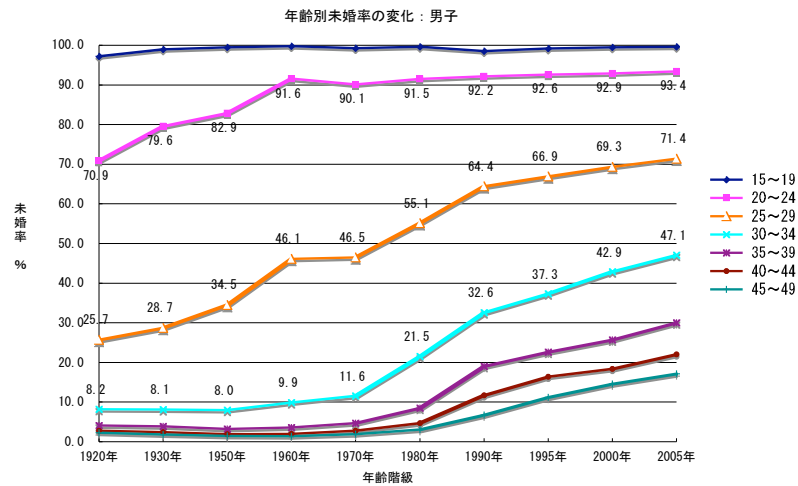
女性の場合は、その上の30-34歳、35-39歳は以前の水準より高まる傾向も見られる。
これは晩婚した分を高年齢で取り戻す(追いつく)という意味で、キャッチアップ効果と呼ばれるもので、大都市圏で、近年、多く見られる現象である。

晩婚化？：未婚初婚年齢と生涯未婚率



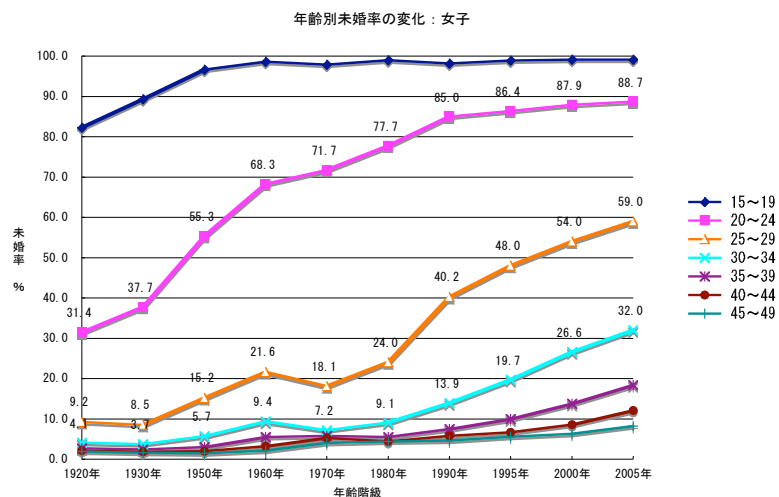
全体として全年齢で初婚確率は低下、全部足しても100%に遠く及ばない。つまり単なる晩婚化(タイミングのズレではなく、結果的に、結婚しない(できない)確率が高まっている)。最終的(正確には50歳時)に未婚に留まる確率を生涯未婚率という。晩婚化が進めば進むほど、生涯未婚率も高まる。特に男性では1975年の27.65歳と2.12%から2005年の31.45歳と15.96%へと急上昇。

未婚者割合：年齢別未婚率（男性）



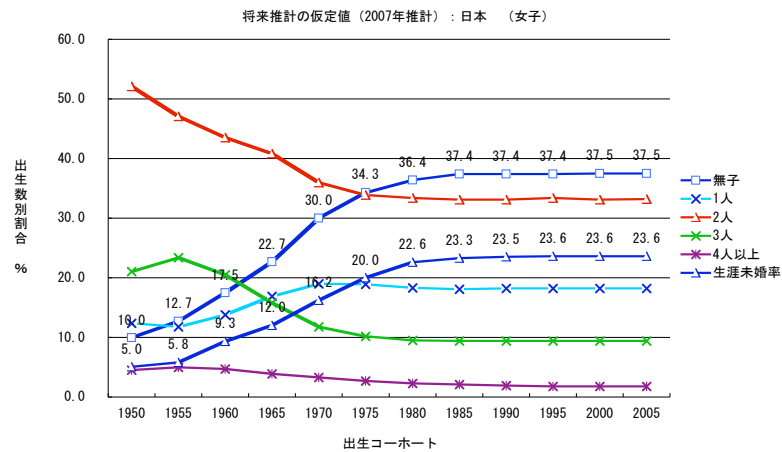
実際、将来のキャッチアップがどうあれ、同年齢階級に占める未婚者の割合を示す、1960年から2005年の年齢別未婚率の変化を見ると、男子の20-24歳が91.6%から93.4%とあまり変わらないものの、25-29歳が46.1%から71.4%、30-34歳が9.9%から47.1%へと上昇。

未婚者割合：年齢別未婚率（女性）



女子の20-24歳が68.3%から88.7%、25-29歳が21.6%から59.0%、30-34歳が9.4%から32.0%へと上昇。かつてなら子供がいても良い30代前半の男性の半分、女性の3分の1で独身のままに留まっている。

将来推計の仮定値

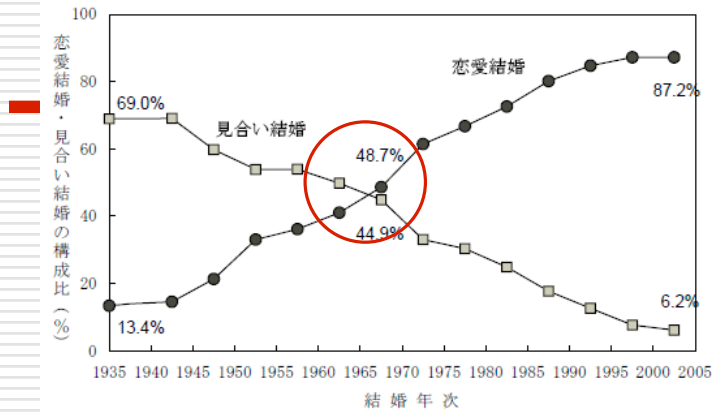


国立社会保障人口問題研究所の2007年推計では、1950年生まれの子どもの生涯未婚率5.0%から、1990年生まれで23.5%、2005年生まれでは23.6%まで上昇すると仮定。日本では未婚者が子供を持つ（婚外出生）ことは希＝生涯未婚者は無子者となる確率が高い。生涯無子割合は37.5%となり、40%近い女性が子供を持たない。さらに子供は生むが1人に留まる場合も加えると2005年生まれの女性の55.7%は再生産しない可能性がある。＊男子の仮定値はないが、生涯未婚率、生涯無子割合、非再生産に留まる割合は、さらに高くなると考えられる。

『恋愛』を巡る状況変化

見合い結婚から恋愛結婚へ

図1-2 結婚年次別にみた、恋愛結婚・見合い結婚構成の推移

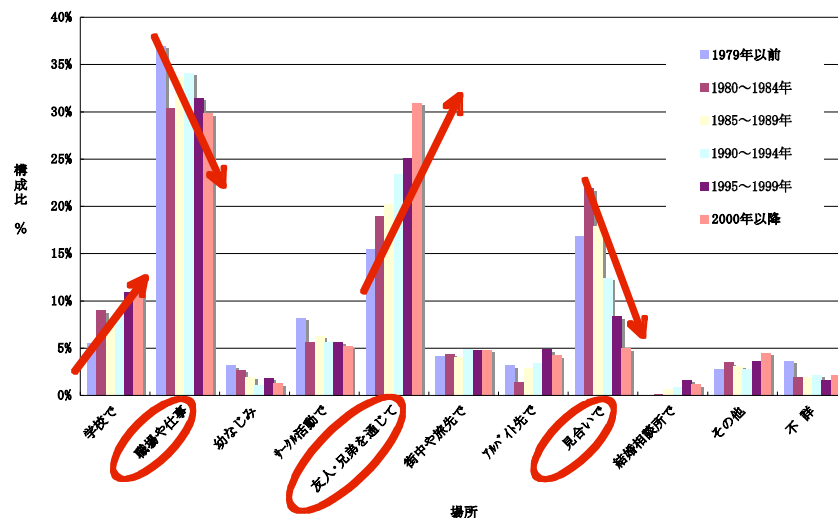


注：対象は初婚どうしの夫婦。各年の数値は付表1（巻末）を参照。

国立社会保障・人口問題研究所第13回出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国調査結果の概要」
2006年6月27日 ＊結婚年次別／1960年代末から1970年の始め。歴史的転換？ 第一次ベビーブーム層の適齢期を反映した1971年の普通婚姻率のピーク時と重なる点に注意！

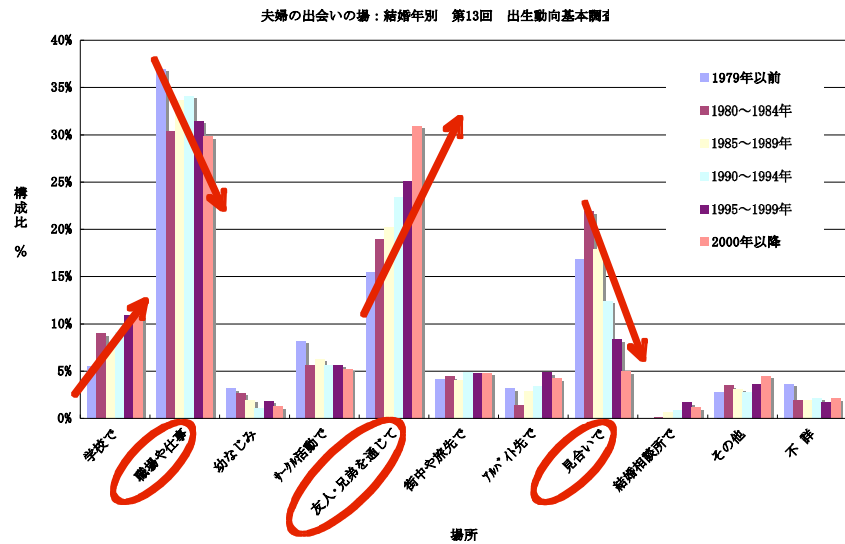
出会いの場は、どこ？

夫婦の出会いの場：結婚年別 第13回 出生動向基本調査

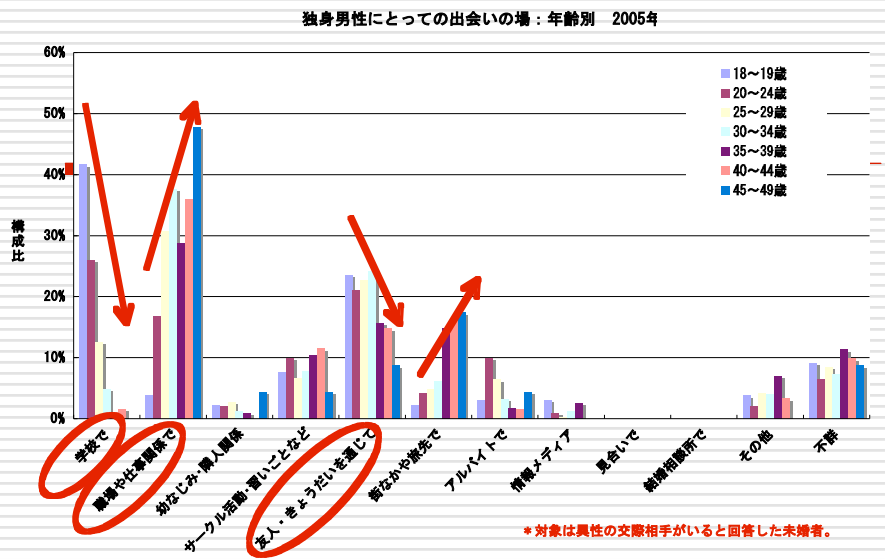


国立社会保障・人口問題研究所 第13回出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国調査結果の概要」

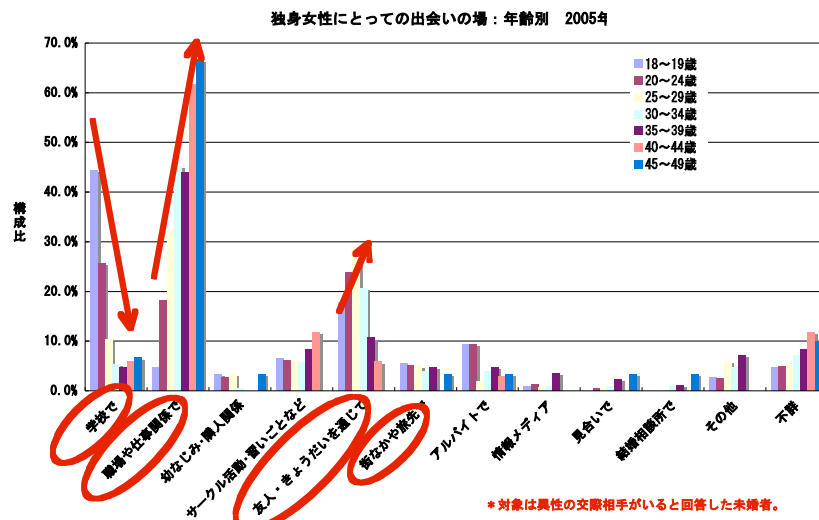
初婚カップルの出会いは？



独身者の出会いは？ 男性の場合



独身者の出会いは？ 女性の場合



国立社会保障・人口問題研究所 第13回出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国調査」独身者調査

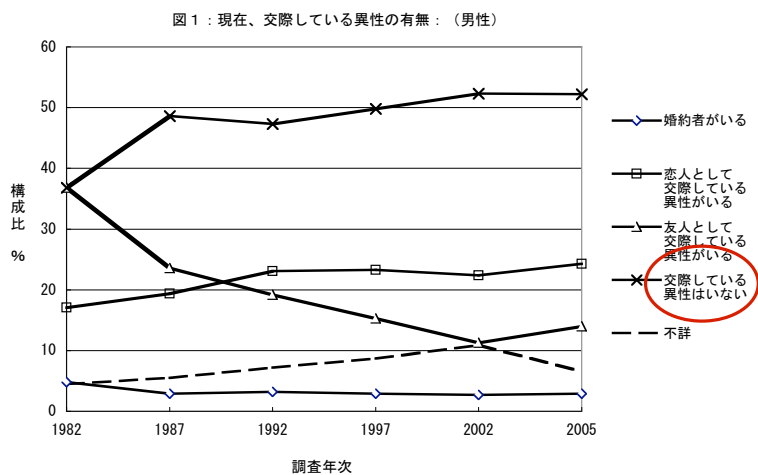
日本における「出会い」の場

1. **学校**：夫婦は近年ほど多い。独身者は若い年齢ほど多い。早い時期での出会いとしては、依然、有力。
2. **職場や仕事**：夫婦では、近年ほど少ない。独身者は高年齢ほど多くなる。若い時は避けるが、年齢が高くと、これしかなくなる？
3. **友人・きょうだいを通じて**：夫婦・独身者とも近年／若年ほど有力。というか、安定的なチャンネルはそれしかない？
4. **お見合い**：夫婦は近年ほど少ない。独身者 殆どなし。
5. その他：偶然の出会いが極端に少ない。

*デート文化の不在？

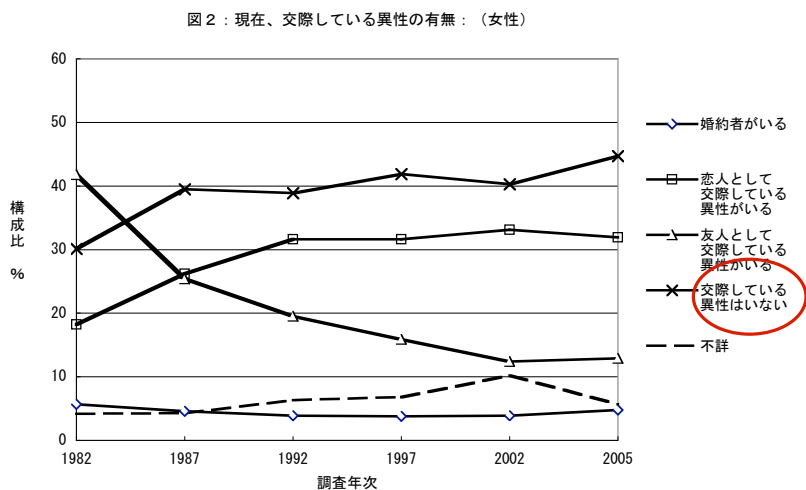
*結婚した人・交際相手がいる人で、この状況だとすると？

異性との交際の状況の推移：男性



国立社会保障・人口問題研究所 第13回出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国調査」独身者調査

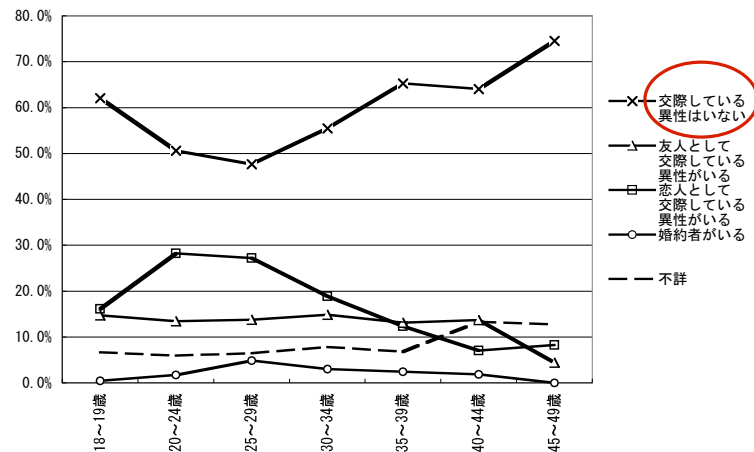
異性との交際の状況の推移：女性



第13回（2005）出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国調査（独身者調査の結果概要）」データベース 国立社会保障・人口問題研究所 <http://www.ipss.go.jp/> 2006年9月22日

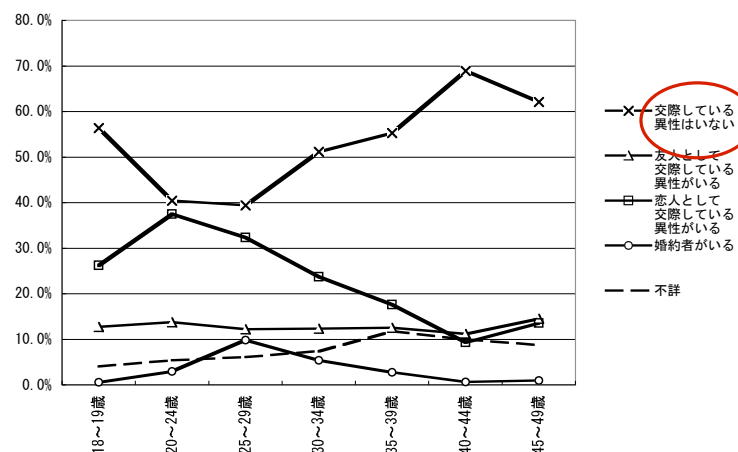
異性との交際の状況：年齢別・男子

図3 異性との交際状況（男子） 2005年



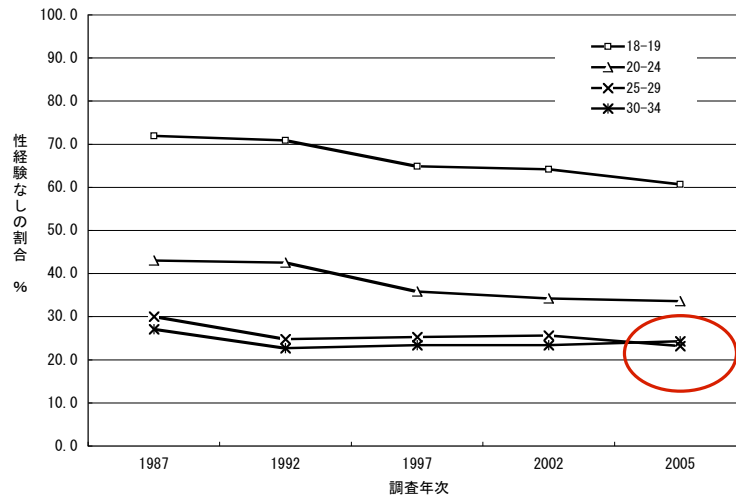
異性との交際の状況：年齢別・女子

図4 異性との交際状況（女子） 2005年



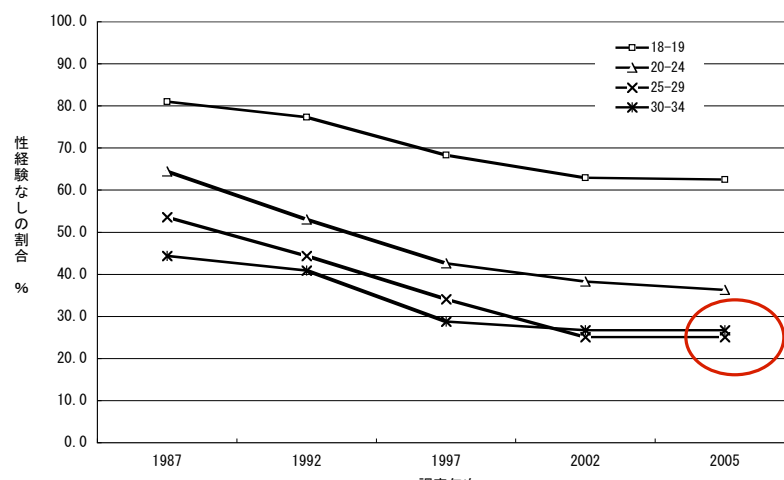
性交経験なし割合：年齢別・独身男子

図5 性経験なしの割合：未婚男性



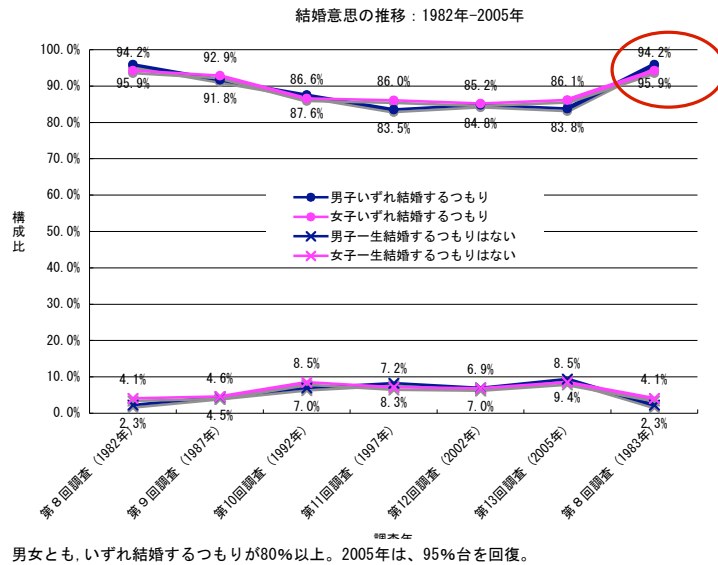
性交経験なし割合：年齢別・独身女子

図6 性経験なしの割合：未婚女性

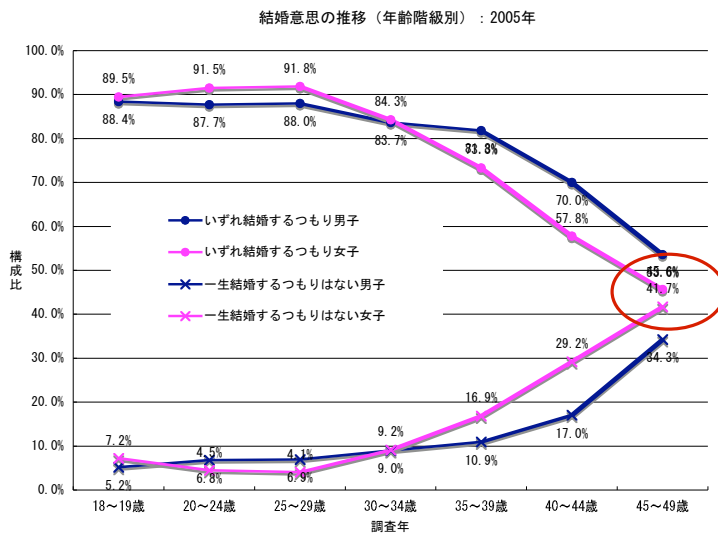


男女とも18-19歳／20-24歳で「性経験なし」の割合が低下。性的活動が早期化していることがわかる。その一方、男女とも25-29歳、30-34歳になっても「性経験なし」が20%ライン以下にならない点から見て、性的に活発な者とそうでない者の二極化傾向が読み取れる。

でも、いずれは結婚するつもり

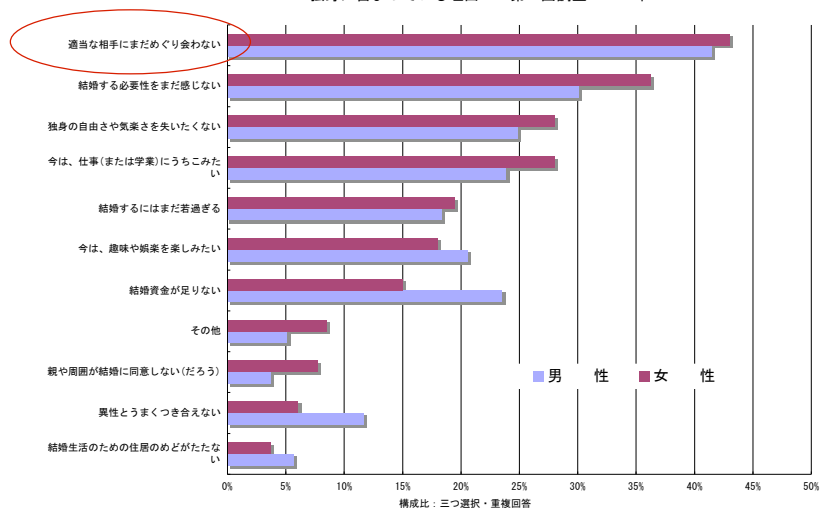


でも、年齢とともに諦める人も



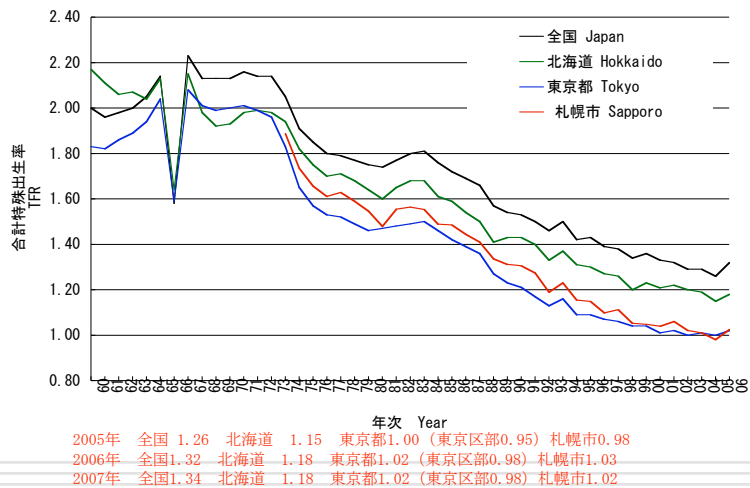
独身にとどまっている理由

独身に留まっている理由 : 第13回調査 2005年

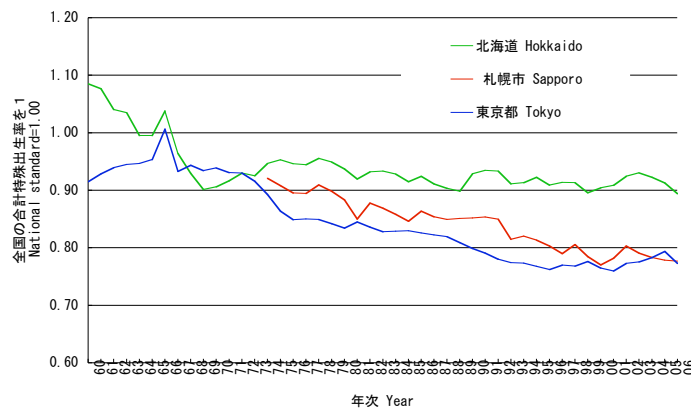


出会いの街としての 札幌市の特異性

合計特殊出生率の推移 Trends of Total Fertility Rates (TFR)

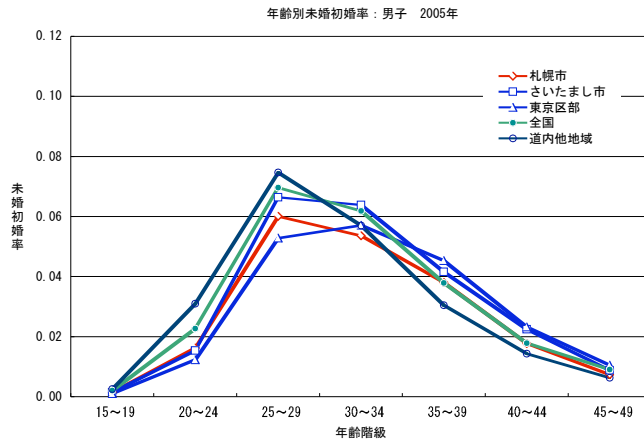


拡大する格差 Growing gap to national standard



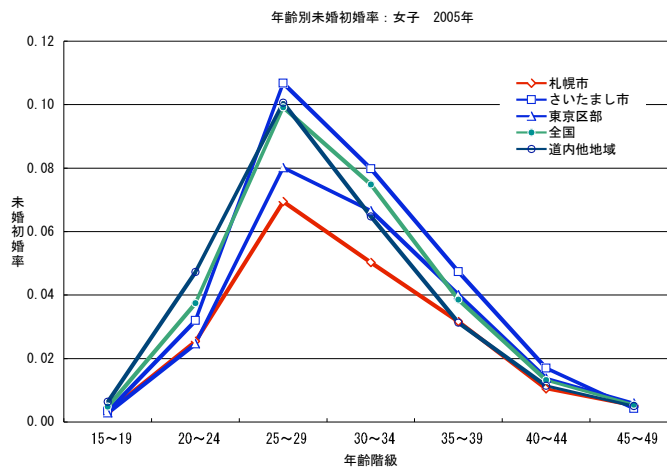
全国を1 (地域の値÷全国値)、北海道全体が概ね0.9で推移、札幌市は2006年で0.78と東京都の0.77に接近、全国との格差は年々拡大。

男子の未婚初婚率： 2005年 first marriage rates of men



札幌市の男子の30-34歳が非常に低い。道内他地域は逆で早婚型。

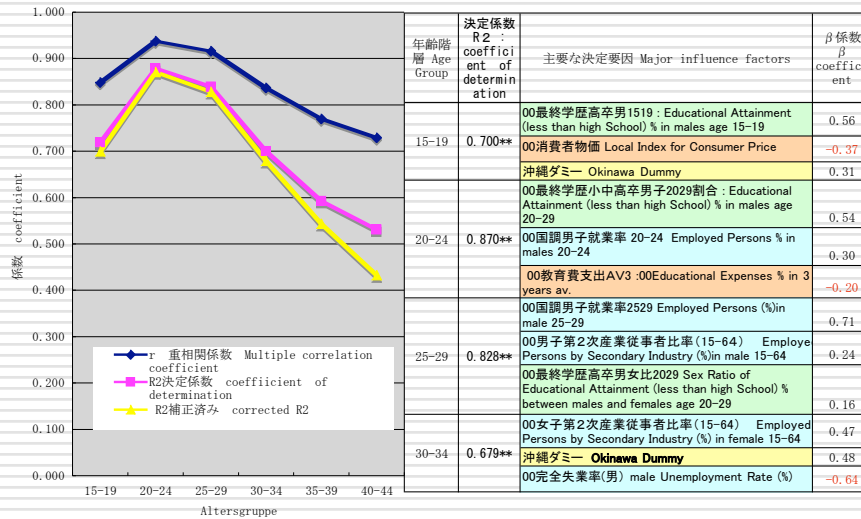
女子の未婚初婚率： 2005年 first marriage rates of women



札幌市の女子の25-29歳、30-34歳が非常に低い。道内他地域は逆で早婚型。

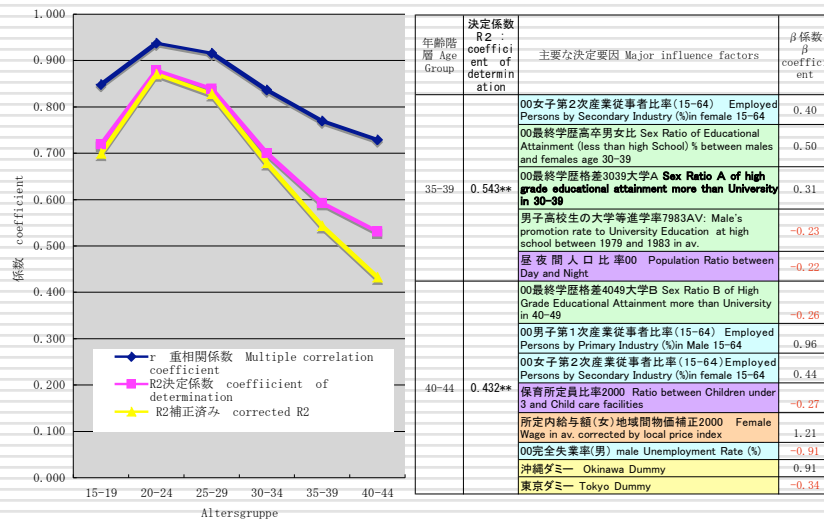
女子未婚初婚率への影響要因 15-34歳

Influential factors on the first marriage rates



女子未婚初婚率への影響要因 35-44歳

Influential factors on the first marriage rates



シミュレーションによる分析 simulations by time series data

1965年から2000年までの時系列相関

Time series regression analysis 1965-2000

＜従属変数 dependent variables＞

□ 女子未婚初婚率 first marriage rates of women

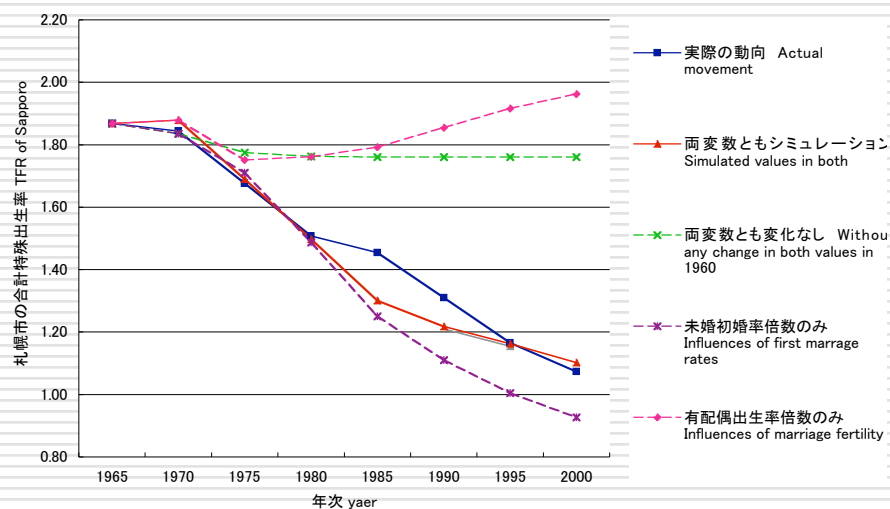
□ 女子有配偶出生率 marital fertility rates of women

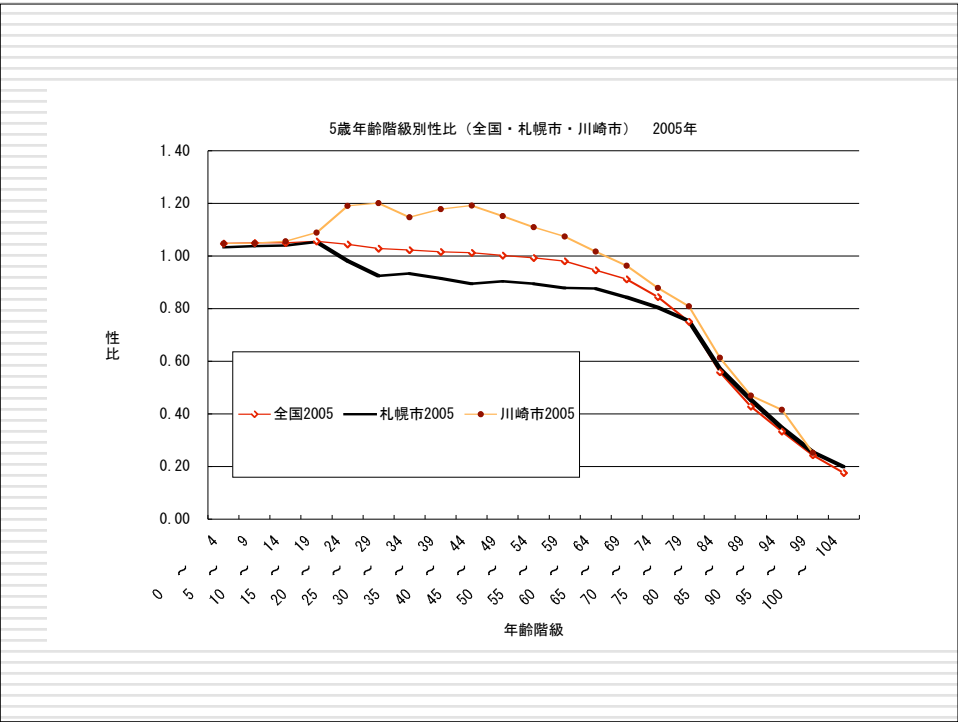
＜独立変数 independent variables＞

□ 男子の最終学歴高卒割合 Educational Attainment (less than high School) % of men

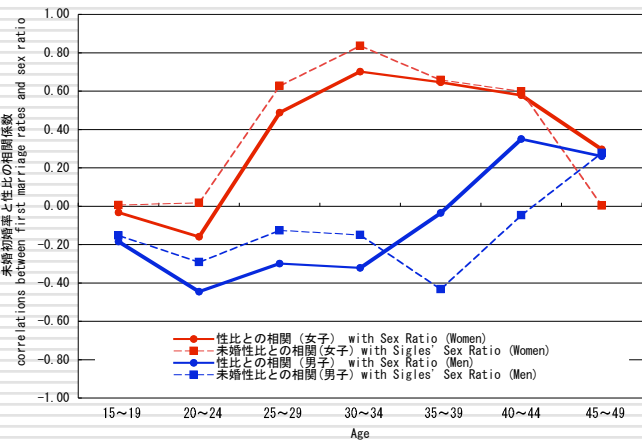
□ 男子の第2次産業就業割合 Employed Persons by Secondary Industry % of men

シミュレーションの結果 The results of computer simulations





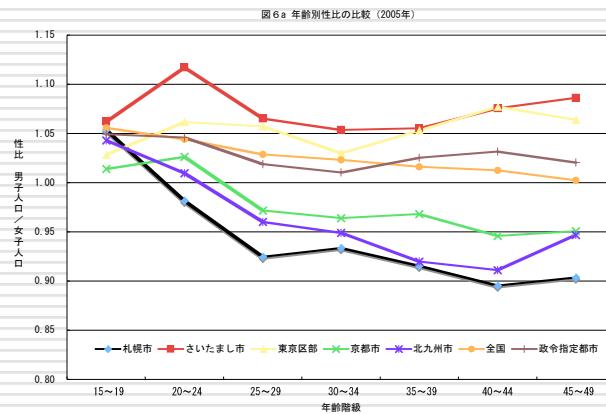
未婚初婚率に対する性比の影響



女子の未婚初婚率は20~24歳、25~29歳のあたりで男女の人口移動率の格差により女性が男性に対し相対的に過剰となることにより発生し、この結果が男女の未婚初婚率格差として、さらに30~34歳以上の未婚性比のアンバランスにつながり、女子の未婚初婚率を低水準に留めていると考えられる。

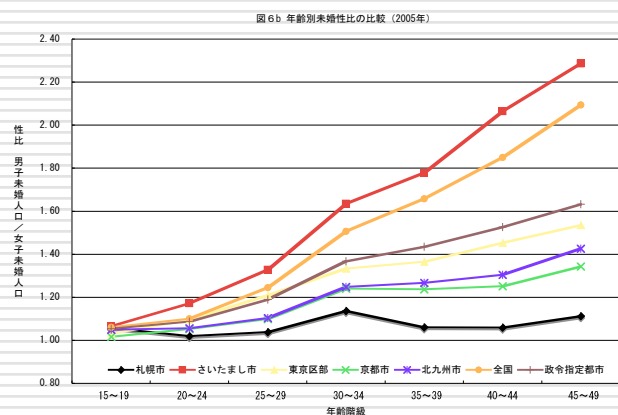
年齢別性比の比較

府県間人口移動の影響がない全国値では、15~19歳の出生性比に近い1.05から45~49歳の1.00まで、性比は男女の年齢別死亡率の差を反映しゆるやかに低下する。、A群（産業都市型）では就業などによる移動率の男女差を反映し、20~24歳で性比が1.12に上昇、次の25~29歳ではやや低下するものの、その後も男性過剰の状態が続く。



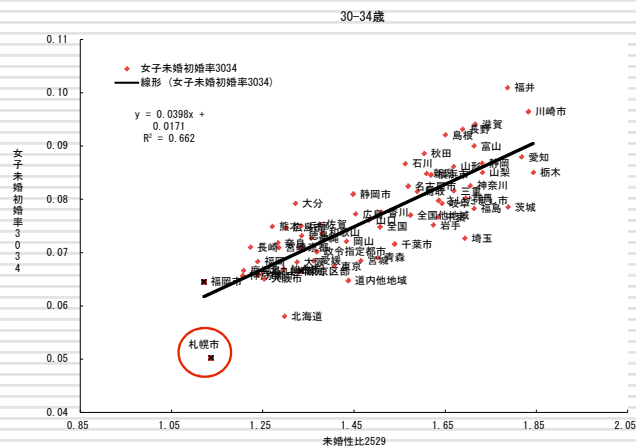
年齢別未婚性比の比較

年齢別未婚性比で見ると、格差の拡大はより明確。性比が20~24歳で上昇、女子の未婚初婚率には有利に、男子には不利に作用する結果、女子の未婚者は結婚により、男子の未婚者より早く減少し、次の25~29歳の未婚性比を高める。このような作用は累積的に進み、最終的に45~49歳の未婚性比は2.29まで上昇する。



30-34歳

未婚性比と女子未婚初婚率

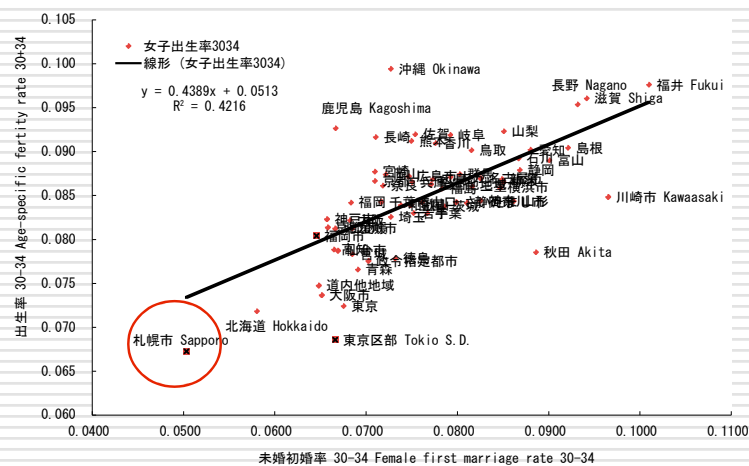


Sapporo City University

41

30-34歳

女子未婚初婚率と出生率



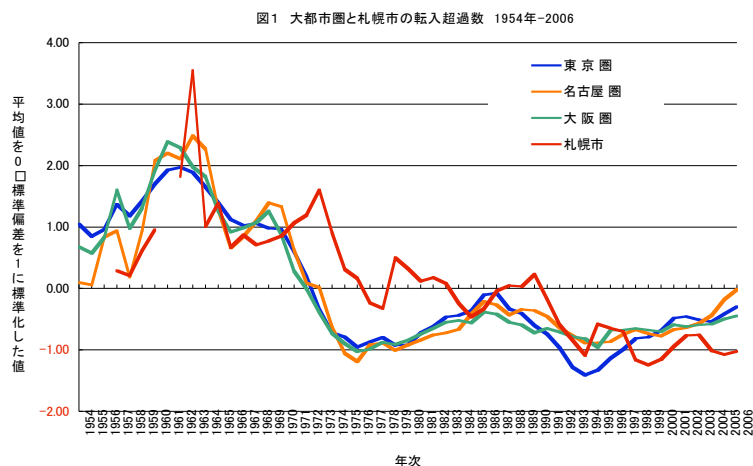
Sapporo City University

42

人口移動と性比の変化

- 1950年から2005年までの国勢調査の性・年齢5歳階級別人口を用いて、札幌市のセンサス間の性・年齢5歳階級別純移動率と各年次における性比を求め
- (1) 純移動率の推移とその背景 (2) 純移動率と性比の関係 (3) 性比の変化と女子未婚初婚率の時系列相関について分析・考察した。

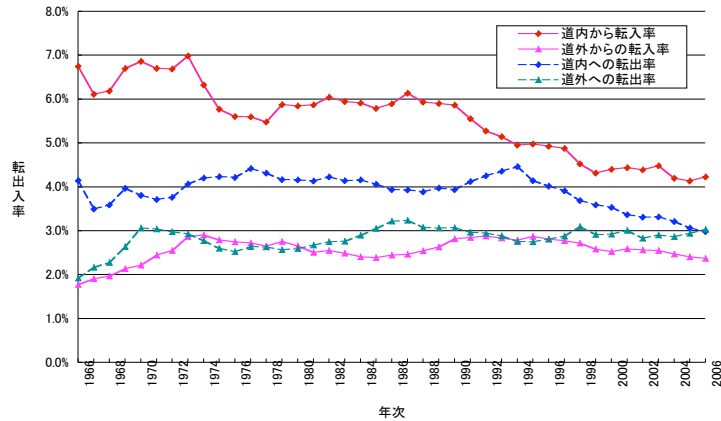
純移動率の推移とその背景



三大都市圏は高度経済成長期の1960年代初期にピーク、1970年代鎮静化、1974年石油ショック以降低迷、1980年代から1989年頃まで回復、バブル経済崩壊後、1990年代半ばまで収縮、その後、回復傾向。結婚と似ている。札幌市もほぼ同様だが2番目のピークが4-5年程遅く、以降の動きもタイムラグがある。

道内・道外別転入出率

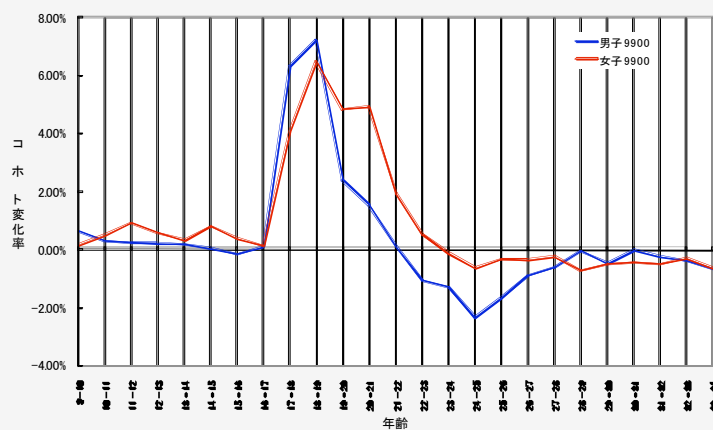
図2 札幌市の転出入率の推移 1966-2006



道内他地域からの転入率が過去一貫して最も高く、ピークは1973年の7.0%、転出率は1994年までほぼ4.0%の水準で安定的に推移、構造的な転入超過が基調をなして来た。道外他地域からの転入率と転出率は概ね2.5-3%で推移。交互に転入・転出超過を繰り返す。

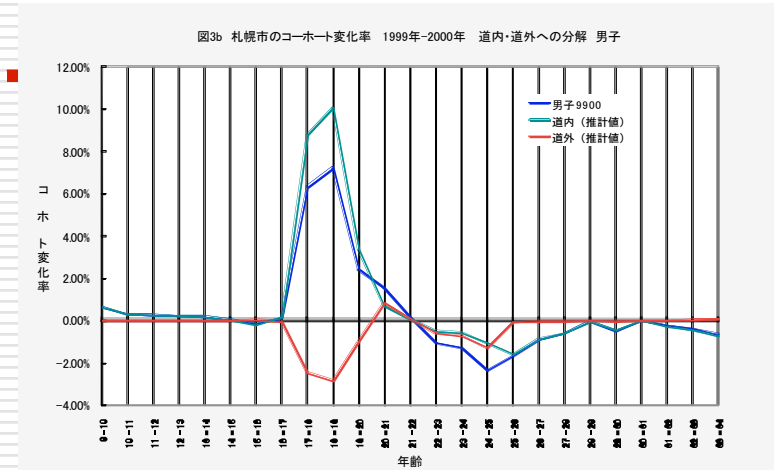
性・年齢別の人口移動率

図3a 札幌市のコホート変化率:1999年-2000年 住民基本台帳データ



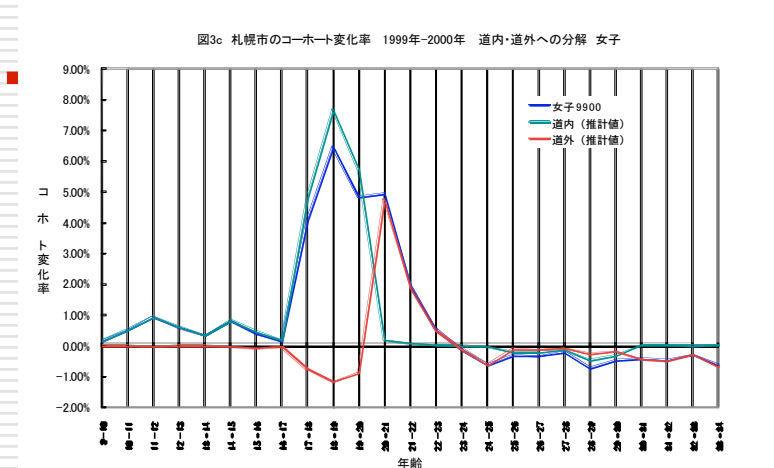
男女とも17-18歳の高校卒業・大学進学段階で札幌市内への転入超過、20-21歳では男子の超過率の低下から格差が開き、大学卒業年齢の21-22歳、22-23歳では男子はマイナスとなり、24-25歳では男女ともに人口流出が起きている。

性・年齢別人口移動率（男子）



男子では17-18歳、18-19歳の高卒就職・大学進学移動が突出、道内からは転入超過、道外へは転出超過、全体としては転入超過。大学卒業・就職年齢の22-23歳から24-25歳では道内道外ともに転出超過、札幌市内に就業機会が少なく男子人口が流出している

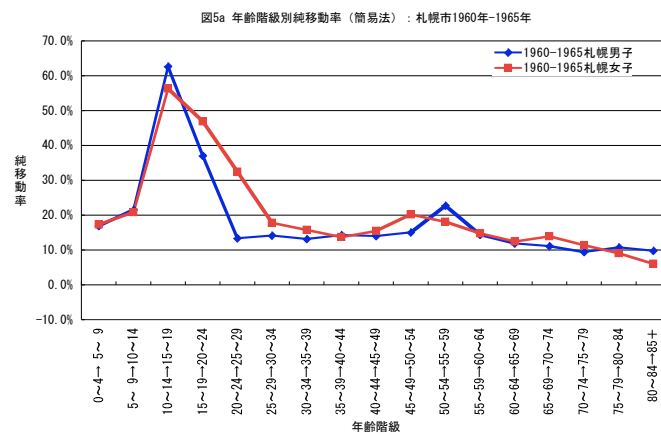
性・年齢別人口移動率（女子）



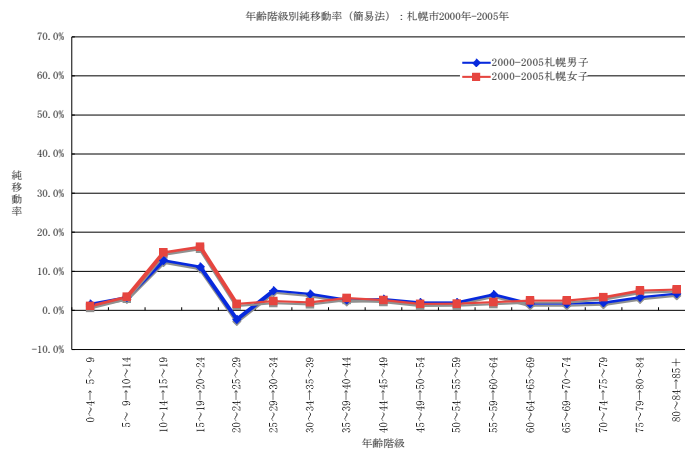
女子も男子とほぼ同じであるが、道外への転出超過は男子より少ない。また男子とは異なり20-21歳から22-23歳までは道外からの転入超過であり、年齢から考え高卒就職組や短大・大学卒業就職のUターンなどの要因が考えられる。

性・年齢別純移動率の変化

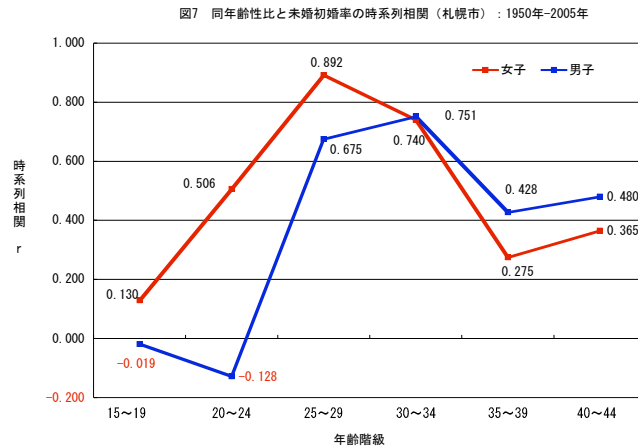
●1960-1965年



●2000-2005年

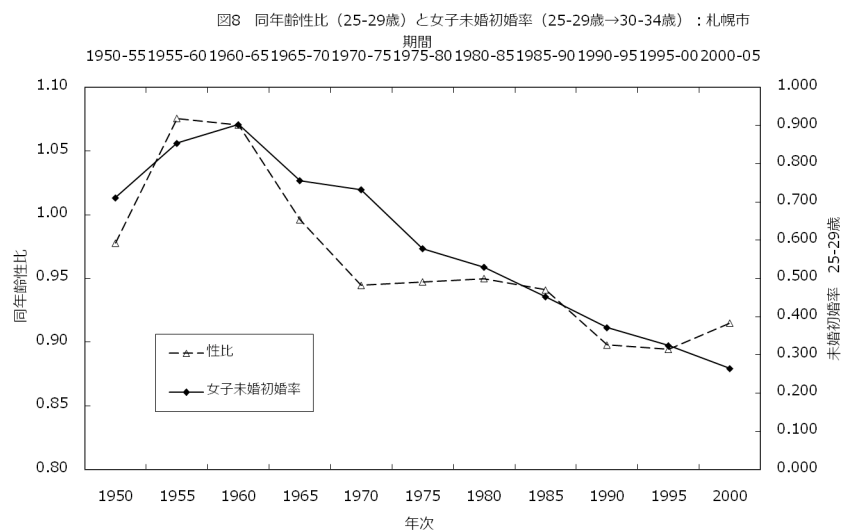


性比と未婚初婚率の時系列相関



同年齢性比と女子コホート未婚初婚率の時系列相関（1950年-2005年）は25-29歳時性比と25-29歳から30-34歳にかけての未婚初婚率で最も高く期間とほぼ同様の結果が得られた。

同年齢性比（25-29歳）と女子未婚初婚率（25-29歳から30-34歳）の動き



「婚活（こんかつ）」問題を考える。

「婚活」時代は、いつ始まったか？

- 「婚活」時代（ディスカヴァー携書 21）（新書）
[山田 昌弘](#)（著），[白河 桃子](#)（著） 出版社：ディスカヴァー・トゥエンティワン（2008/2/29）
ISBN-10：4887596235
- 「パラサイト・シングルの時代」（1999年）
 - 未婚女性の結婚離家→生活水準の相対的低下
- 「希望格差社会」（2004年）
 - ニューエコノミー→格差の拡大→結婚リスク化／二極化（勝ち組・負け組）
- 就職活動と同じ「婚活」が必要な時代となった。

基本的な流れ

- 晩婚化・未婚化・非婚化の流れはすでに1970年代中頃から始まっている。
- 非婚同棲も含め、社会的再生産の機能低下（要するに出生力低下）という点ではさらに1900年頃まで遡る。
- 見合い結婚から恋愛結婚へ
- 恋愛＝結婚ではないが恋愛が結婚の前提条件
- 日本国憲法第24条：「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有する。」
- 「婚姻の自由」は保障されているが「婚姻」自体は保障されていない点に注意。
- 原因や政策的対応は別として個人として結婚を望むのなら、婚活（こんかつ）は必要だろう。

傾向と対策 *個人的な対応

- 札幌市の状況（その1）：25-29歳性比のアンバランス。→女性の相対的過剰。男性にとっては有利。女性はお友達ルートで道外を探すと良い（川崎市・さいたま市・千葉市など）！札幌市以外の道内市町村は女性が有利。求む農業青年！
- 札幌市の状況（その2）：男性の就業機会、特に第二次産業系は少ない→工学系男性は希少。男女とも高学歴→高学歴者にとっては有利。基本的に早い者勝ち。時間との戦い。
- 早婚晩産の奨め。とりあえず相手を見つけて結婚してしまう。学業、収入、仕事、同居別居、子どもなどは、成り行き応じて考える。*ダメなら離婚すれば良い。
- 結婚したい人にとっての結婚リスク→未婚に留まるのが最大。
- 楽観的な見通しが大事。
- 結婚相手→性比のバランスが影響する＝基本的に身の回り。出会いがしらの交通事故。1960年-1970年代までの皆婚状況を考えて「赤い糸」で運命的に結ばれているとは思えない。

ご清聴ありがとうございました。